『小一教育技術』一九五七年十月（小学館）

聞き取る力と理解の問題

―わかるということと聞きとる力はどんな関係にあるか―

矢口 新

物の価値を理解する基盤となるもの

ノーベル賞をもらって有名なシュヴァイツァー博士は、赤道アフリカのランバレーネで病院を経営していることは、だれも知っているであろう。その博士がアフリカの黒人の物の考え方についておもしろいことを書いている。それは黒人が価値というものにまったく無理解だということである。

博士のランバレーネの病院には、たくさんの黒人が入院している。彼らは夜はずっと一晩中たき火をする習慣がある。ところが、どこにでも木があればすぐもやしてしまう。博士がたいせつにしておかなくてはならぬと思っている梁や板を平気でもやしてしまう。すぐ近くに原生林があるから行つてとつて来ればよいが、彼らは決してそうしない。目の前にみえるものならどんなたいせつなものであろうとどんどんもやしてしまう。

もやさせないようにしておくためには鋸のかかる部屋にしまっておかなくてはならない。ところがそれができない時だつてある。ある夕方ボートの修理をするため、ボートを裏返しにして、その屋根をはずしておいた。その日よけの屋根は、小割板や薄板で苦心して作ったものであるが、翌日、博士は、そのたいせつなものが炭になって、黒人の火の中にあるのを見な

ければならなかった。こんなことはしょっちゅうあるので、博士は板をあつちへかくしたり、こつちへかくしたりしていなくてはならない。

黒人たちは、労働によってつくられたものというものに対して価値を認めることができないのである。まだこんな話もある。

足が潰瘍になっている黒人の患者にほうたいをしてやる。そして、毎朝ほうたい交換の時に、その古いほうたいをかわで洗つてもつて来るようにいつける。黒人は翌日、洗つたほうたいを持参することなしにやつて来る。かれはそれをあつさりすててしまったのである。そこで親切に説明して、洗つて持つて来るようにいう。病院のじょうぶなふちどつたほうたいが高価であること、ヨーロッパの親切な人が古い布を手に入れてそれをほうたいに縫つたり、縫い合わせてほうたいの縁をつくつたりする労力を考へて、それをそまつにすることは重い犯罪だというようなことを説明する。しかしその翌日もほうたいは水の中ですてられてしまう。第三番目のほうたいもまた同じである。この男にとつてはほうたいは一片の布にすぎず、ドクトルはまだたくさん持つているから、古いものはすててもかまわないというわけである。そこでどうとうほうたいをすてたら食糧を与えないことにしてやつと改心させた。

博士は政心させたと書いておられるが、これは改心であるのかどうかはわからないと思う。ともかくたいへんな無理解さがある。

しかしこの博士の労苦もさりながら、私のいいたいことは、子どもの理解ということについて同様なことがありはしないかということである。私はこれに類することを親や先生たちは経験しているのではないかということを考えて、苦笑するのである。黒人ほどでないにしても、親はしばしば、なん度言いきかせても、子どもが守らないといったことを経験するのである。着物をよごす、洗いたてのパンツで、土の上に腰をおろす。文句をいってとりかえてやった次の瞬間にもう、土の上に腰をおろす。腹をたててお尻をたたくなつてことはしょっちゅうではないだろうか。

「わからない子だねえ」などということばは、たえずこの親でも口にするこゝばである。

言つて聞かせるとわかるとおとなは考えているが、わかる、理解するということは、実はそんなものではないのだろう。そのことを考える例として、私は、はじめに、わざわざ遠いアフリカの話を持ち出したのである。しかしじつは身近にあることなのである。

アフリカの土人が、せっかく労力をかけて作った板や包帯を惜しげもなく捨ててしまうのは、おそらくだいにじにするという習慣がないのであろう。労力をかけて作られたものが財産であり、価値があるということが、てんでわからないのであろう。いくらこゝばで説明しても、むだなのである。そういう経験がまったくないということであろう。生きるにもっとも必要な食物でも、労力をかけて作つておいて、それで一年間の生活をするなどということが彼らにはないのである。食物はそこらにあるものを食べられる。まさかいくらアフリカでも今ではそれほどでないにしても、それに近い生活なのであろう。

ここでは、唯一つ、物の価値ということについての理解だけを問題にしたのであるが、ただこれだけのことで、人間の長い生活からつくられた習慣があつて、その習慣の中で物をつくりそれを使って生活しているうちに、その具体的な経験が、人間に物の価値というものをわからせるようにするのである。ヨーロッパ人と、アフリカの土人では、話が通じない。一方の生活習慣、その中で経験が他の一方とまるでちがつている。いつてみれば、人類が農業をはじめ以前の状態にあるのがアフリカの黒人である。わかるということが可能ならしめるものは、経験、さらにその積み重なつた習慣のようなものもとても大きい。とくにこのことは、幼児から小学校の一、二年生ぐらゐまでの子どもを考える時には絶対に忘れてはならないのである。この間に人間の生活の基本的な生活習慣、したがつてまた物の考え方も身につけるのである。一年生はようやくそういうものが

身につけて来て、やっと話が通ずる段階に到達したころなのである。

「じつくりする」ことがわかつたことではない

——一年生の指導のポイント——

幼児はお互に話し合つていても、人の話を聞いているのではない。集団的独語をしているのだということばだれでも知つていようであらう。話し合つているから、相手の話を聞きとつていのかと思つと、そうでなく、相手の話の中のあることばがあたかも一つの刺激剤になつてこれを機縁にして、こちらはこちらで勝手に何か考えたり、言つたりしている、その時の土台になつていゝものは自分の経験である。そしてそれがそれぞれがう。そこでんで話は通じないのである。一年生はまだそういうなごりもある時期である。ひとりひとりによつてちがうが、全般的にみて、そういう段階からようやく次の段階へ一歩はいつたところである。つまりこのころまでにやつと人間なみの経験を一通りしたという段階なのである。それでも実際に教室での授業のようすをみてみると、先生が何かいうと、それを機縁にして、次から次へと勝手に考え行動して、どこへつ走つて行くかわからんといつた子どもも多いのである。つまりまだ本当に人の話を聞きとるところまで行つていないのである。つまりこゝばと経験の結びつきがおとなとまったくちがひ、子ども同士まったくちがう。一定のレベルに到達していないのである。

聞きとるといふことは、ただこゝばだけの問題ではない。話してきかせてわかると思つていゝ親があるが、アフリカの黒人のことを思い出してみる必要がある。なるほど話は聞いている。うなづく。こつくりする。それでわかつたと思うが、何もわからないことがある。次の瞬間、それをまったく反対の行動で見せてくれる。黒人が叱られても、説明されてもほうたを捨てようなものである。つまりわかるといふのはそのこゝばが生活

行動の中へ位置づいた時、わかるというのであり、聞きとったというのも、そういう時、本当に聞きとったというのである。実際にほうたいを捨てないという行動が出たときわかったというべきであろう。

しかしそれも、捨てたら食事がもらえないから捨てないというのでは、まだ捨ててはいけないことが内面的に、わかったという段階ではない。ただそういうことを習慣的にくりかえしているうちに、ほうたいというものについてたいせつだという価値観が習慣的に、沈澱するのである。なるほど、そういうえば、もしほうたいがそこらに、石のようころがっているものならだれもたいせつにしはしない。だいにするのは、われわれの生活全体の構造から、それがつくられ使われるのに労力がいり、費用がいるということがあるからである。そういう全体的な生活体系の中で、たいせつにするということがわかるのである。

わかるとか、理解するとかは、こういった生活体系がわかることなのであり、それがあるから、聞きとることができるのである。

だから、聞きとる力が理解の基礎なのではなく、むしろ理解が聞きとる力の基礎なのである。経験、そのつみあげ、それが聞きとる力をつくりあげてくるのである。

よく母親などが「よく先生のお話をきくんですよ」といって学校に出してやる。「ハイ」と子どもは出て行く。これを子どもは、どう聞きとっているか。考えてみるとおもしろいものである。母親が考えるように、先生のたいせつな話をよく聞いてなどと子どもは思っていないのである。つまり子どもの理解している母親のことばと、母親自身のそれとは、たいへんなちがいがあがる。一年生くらいではそういう段階なのである。だから母親のいう簡単なことば、「先生のお話をよく聞くんですよ」ということでさえ、まだ聞きとる力をもっていないというべきであろう。このことを忘れて、聞くということ、抽象的に、形式的に問題にしても、それは、子どもに聞く力をつけることにならない。からまわりをするだけになって

しまふ。聞きとることがたいせつだという具体的な経験がたいせつなのである。

だから一年生くらいのうちは、気の長いことがたいせつである。つまり、話が聞きとれるということは、それが経験を伴なうということだから、ことばと経験とが結びつくのに時間がかかるということである。「先生の話をよく聞く必要がある」ということも、たえず、年中、いわれ、聞いていよううちに、具体的経験が伴って来ていつかわかる、だんだんわかるというものである。具体的にわかる、ということについては、たいへんな時間が必要なのである。時間というのは、経験の量と考えてもよい。

つまり聞きとる力というのは、ことばを聞いてその具体的な内容がわかることなのだから、聞くことをくりかえして、経験と結びついて行くというようにして長い間に養われるものである。

「廊下を走らないようにしましょう」などということは、たえず言っていないではならぬ。廊下を走ることはいけないことだということは、ことばだけではわからないのである。いや事実は、経験的には走ってもいいことさしつかえないことが多いのである。だからこのことばでも、本当に聞きとるという力は一年生の子どもにはないというべきだろう。おとなが走っていないというものは、たまに起こること、万一のことを考えているからである。その万一がわかるのには、時間がかかる。走ってけがをするということがあって、思い当るのである。その時わかる。その時、そのことばを聞きとったというべきであろう。

聞きとる力というのは、わかる力なのである。それは耳からはいることばだけの問題でなく、むしろ耳からはいる音を受けとめる体験の問題なのである。

(国立教育研究所員)